

## まえがき

私の故郷、信州佐久郡鑑掛村（現小海町）は日本一の大河千曲川の上流、佐久平の一角にある。かつて、この地域は、度重なる自然災害に加え、各地の土豪同士の争いが繰り返され、果ては武田信玄の信州攻略と、これを迎え撃つ村上義清との絶え間ない攻防により、ここに住む農民にとって生きた心地がしなかった。

漸く安寧のときを迎えたのは、秀吉が天下を平定し、戦国武将仙石権兵衛秀久が、小諸五万石に封ぜられてからである。

私の故郷が開村したのは、秀久入封して間もなく千曲川の段丘上の福山川原に秀久によって新田開発が命じられ、その後三十年の歳月を経て、元和六年（1620）、秀久の息子忠政の時代になってからである。

ところが、佐久地方の人々にとって、秀久の評判は決して良くない。我が故郷にとっては開村の恩人と言うことになり、このギャップはどこから来ているのだろうか。

仙石氏は、小諸入封後、わずか三十三年で隣の上田領に移封となり、それから八十四年後には、但馬出石（現兵庫県）に国替えとなっている。

この一戦国大名と其の末裔達の跡をたどると、江戸幕府の膝下に組み伏せられながら、一度にわたる国替えによる財政危機を、必死に潜り抜け、明治維新を迎えている。

歴史は、勝者のみによって書き残されると言つが、江戸時代後期には、諸大名同士の養子縁組や、重婚などが繰り返されたため、薄弱な子弟が多かつたといわれている。

そうした中で、仙石家は、藩祖秀久より一系の元を受け継がれ、藩主自ら直裁の元に、藩政改革に取り組むほどの英邁な藩主が多かつた。仙石家が辿つた夫々の時代背景と、残された文書から、仙石家がくぐり抜けた歴史の真実は何であつたか探つてみた。

なお、執筆の途中で、様々な古文書を参考に従来の仙石騒動の通説を覆す名著「仙石騒動」を著された宿南保先生にお会いできる幸運に恵まれ、様々な、有意義な御意見を頂いた。

また、上田市立博物館のホームページと、出石町史の内容の一部を使わせていただきました。ここに、改めて、深く感謝申し上げます。

著者